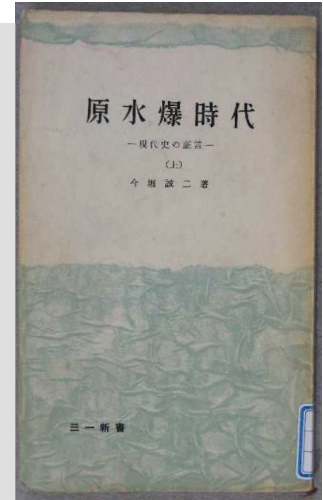


広島県立文書館 収蔵文書の紹介 <2007.8.13 ~ 10.31>
『原水爆時代』と今堀誠二文書

今堀誠二文書は、同氏が広島での戦後史に関わる資料を県史編さんのため提供していたものである。

今堀誠二（1914～1992）は、中国近代史の研究者として著名であるが、原水爆禁止運動など広島における種々の社会的活動にかかわり、また、原水爆禁止運動の同時代史的研究書である『原水爆時代』上下（1959・1960年、三一書房）を執筆している。彼は歴史の当事者（運動参加者）であると同時に歴史（同時代）の観察者でもあった。したがって、今堀誠二文書には活動に参加するなかで集積したものに加え、『原水爆時代』執筆などのため収集したものもある。

ここでは、『原水爆時代』で取り上げられているいくつかのトピックに関わる資料を紹介する。
（安藤福平）



パーチェットの広島入り

『原水爆時代』は、1945年（昭和20）9月3日、単独広島入りし、その惨状を海外に伝えたパーチェット記者の行動をまるで映画のシーンのように再現している。パーチェットを案内した歌橋淑郎（同盟通信社）や逓信病院の医師・勝部玄の書簡はその裏づけとなった。

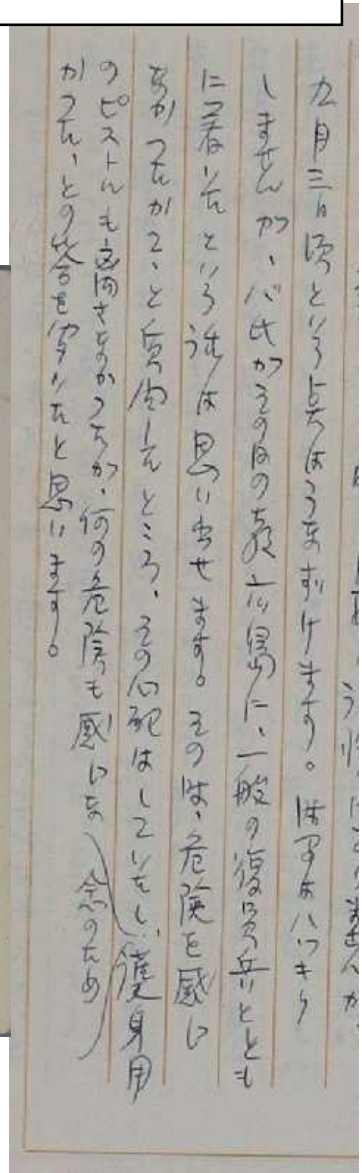
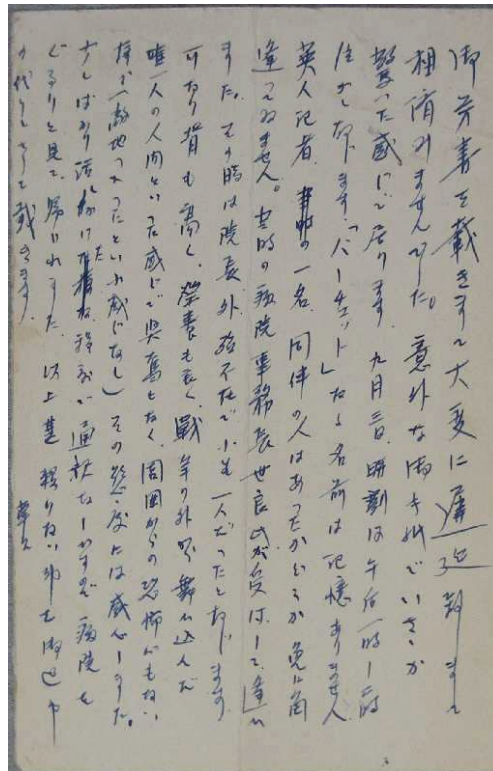
1 歌橋淑郎書簡（パーチェット氏広島取材を案内した時の回想）1959.5.3

「バ氏がその日の朝広島に、一般の復員兵とともに着いたという話は思いません。その時は、危険を感じなかったか？と質問したところ、その心配はしていたし、念のため護身用のピストルも離さなかったが、何の危険も感じなかった、との答を聞いたと思います。」

「市内の病院はたしかに逓信病院のように思います。……蜂谷院長に会ったかどうか分かりませんが、若い医師の説明は聞いたように思います。」

2 勝部玄葉書（パーチェット氏病院訪問時の様子について）1959.5.23

「九月三日、時刻は午後一時二時位かと存じます。『パーチェット』なる名前は記憶ありません。英人記者一名、同伴の人はあったかどうか、……その時は院長外、殆不在で小生一人だったと存じます。可なり背も高く、栄養も良く、戦争の外から舞い込んだ唯一の人間といった感じで興奮もなく、周囲からの恐怖心もない様で（敵地へ入ったといふ感じなし）その態度には感心しました。少しばかり話しかけた程度で通訳なしですので病院をぐるりと見て帰られました。」

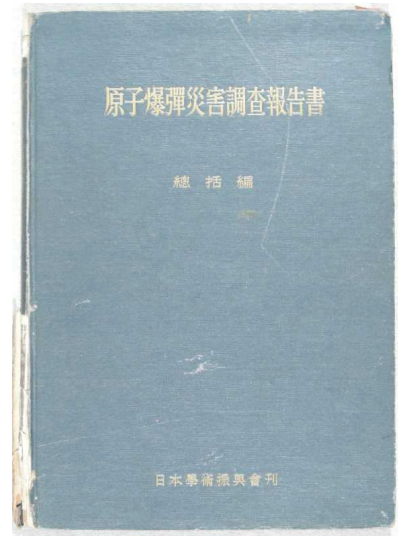


狡兎死して、走狗烹らる 日米合同の原爆被害調査

原爆に関する科学的調査は投下直後から行われ、1945年9月には文部省学術研究会議のもとに原子爆弾災害調査研究特別委員会が発足した。一方、アメリカでも原爆の効果（威力）を調査するための調査団が組織された。日本側のそれまでの知識やデータを吸収するため調査は日米合同で実施されたが、各種の調査資料はアメリカ調査団がすべて本国へ持ち帰った（同年末）。以後、原爆情報の独占を企図するアメリカの意向により、日本の科学者による原爆被害研究、特に研究成果の公刊には大きな制約がかけられた。『原水爆時代』（上 108 頁）は、「狡兎死、走狗烹」のたとえのとおり、アメリカ側が単独で研究を進め得る段階に入るや否や日本側の研究を妨害し禁止するに至ったと憤っている。

3 原子爆弾災害調査報告書 総括編 1951.8

文部省学術研究会議のもとに発足した原子爆弾災害調査研究特別委員会が1945年9月から翌年にかけて実施した調査研究（米軍との合同調査）の成果を刊行した。本編は1953年3月に『原子爆弾災害調査報告集』（第一分冊・第二分冊）として刊行された。占領軍の圧力により日本の科学者は原爆被害に関する研究の成果を長い間公刊できなかつた。



4 大橋成一葉書(事実関係問い合わせへの回答)1959.6.15

「軍医学校と東京第一病院のメンバーを中心に、看護婦等百四十四名からなる原爆症救護病院が編成され、九月十二日には宇品の旧大和紡績寄宿舎を利用して、業務を開始した。

院長に発令された近山大佐は、自分の開業準備に忙しく、広島に赴任しなかつたので、庶務主任の大橋成一氏が全責任を負って、よく奮闘した。」(上 100 頁)

労働者演劇と原爆

『原水爆時代』は、反原爆運動の魁として占領下の原爆タプーのなかでの文学芸術活動に着目した。「われらの詩の会」の活動もそのひとつである。今堀は演劇活動と原爆との関連にも注目し、杉田俊也と中川秋一の回想を得ている。



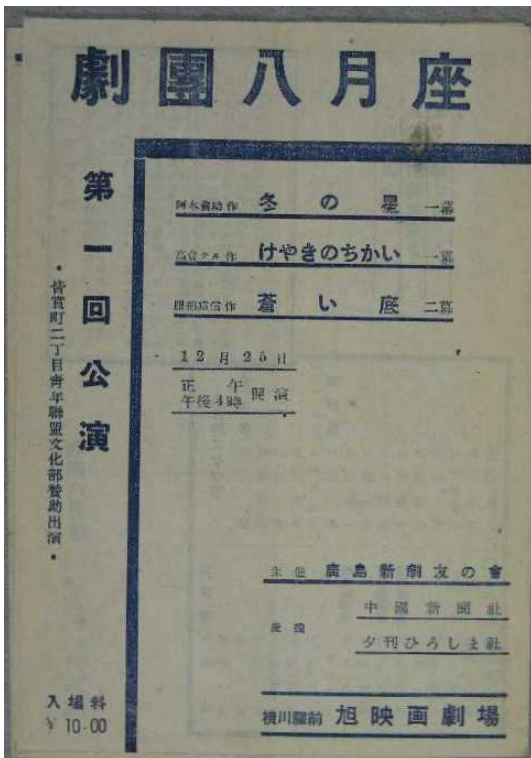
5 われらの詩 昭和 25 年第 4 号 1950.3.3

「峠三吉を中心として『われらの詩の会』が生まれた……広い範囲の人が発起人となり、国民の生活の中から自然に生れてくる詩情をくみあげて、平和を守ろうというのが、主題となっていた。」(下 13 頁)

6 杉田俊也書簡(劇団八月座の回想)1960.2.7)

「八月座は、原爆（八月六日）と敗戦（八月十五日）と座の誕生（八月）の三つの八月にちなんで、我々広島郷土劇団としてふさわしい名前だといふので、命名されたものです。」

「構成員の殆どが原爆の被災者であり、原爆をにくみ、戦争をにくむ心のたかまりが、『八月座』を命名し、文化運動として結集されていった事に違いはありませんが、レパトリーの中に特に意識して、原爆をとりあげるといふ事はありませんでした。」



7 劇団八月座第一回公演案内リーフレット(1946.12.25)

「ごあいさつ 原子砂漠の広島に、民衆の中から、全民衆のための演劇をめざして、ひとつの劇団が誕生しました。その名も八月座!.....」

8 中川秋一書簡(占領下平和運動・原爆問題への取り組み)

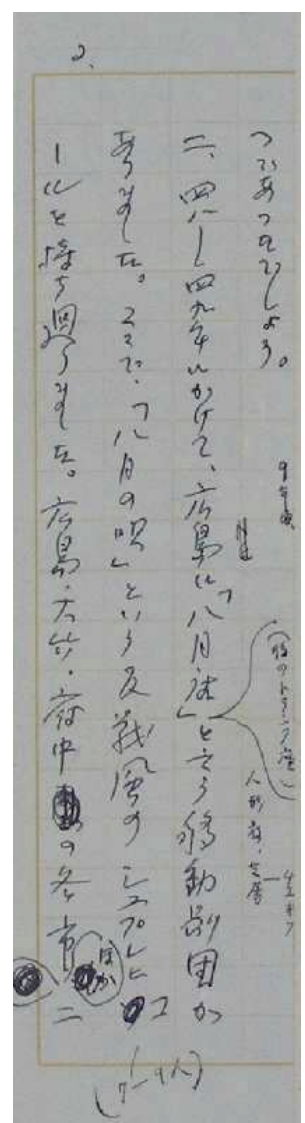
「.....四八 四九年にかけて、広島に『八月座』と云う移動劇団がありました。ここで、「八月の唄」という反戦風のシュプレヒコールを持ち廻りました。.....これは既に意識的な戦争反対、原爆反対の運動であったでしょう。...」

9 破戒上演案内リーフレット(電産中国配電演劇部・広島芸術劇場) 1948.6.5

島崎藤村の原作を「現在の意義をあたえる」ことを主眼に脚色し、主人公は「アメリカに逃避するのではなく、日本で解放運動に挺身」するなど、「いろいろの点で原作を発展させた」とある。この公演を機に八月座と学生演劇の青春座が合同して広島芸術劇場となった。

10 広島自立劇団協議会結成大会プログラム 1948.2.11

11 広島小劇場第六回公演 1948.11.23



10 年前と同じ時間に同じ場所で 原水爆禁止世界大会

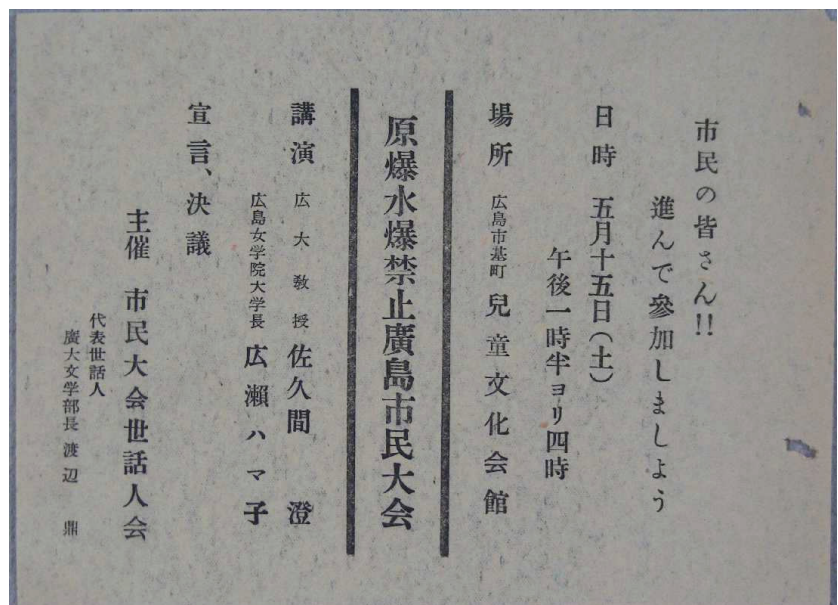
1954年(昭和29)3月のビキニ被災を機に原水爆禁止の世論が高まり、原水爆禁止署名運動が全国的に展開された。翌1955年8月6日、署名運動の報告大会として原水爆禁止世界大会が開かれた。「運動は署名運動から大会運動へと、大きく転換していくことになった。」(下138頁)

12 原水爆禁止広島市民大会のちらし 1954.5.15

ビキニ被災を機とする全国的に原水爆禁止の世論が高まるなかで、広島では5月15日に原水爆禁止広島市民大会が開催された。この大会では、原子兵器禁止の大会宣言が採択され、県内で100万の署名を集めること、8月6日に平和大会を開くことが決定された。

13 原水爆禁止世界大会広島大会 日程 1955.8.6

1955年(昭和30)8月に開催されたこの大会は、もともとは原水爆禁止署名運動の報告大会とし



て開催されたものであったが、以後毎年開催される原水爆禁止世界大会の最初の大会となった。「最後を飾った『原爆ゆるすまじ』の大斉唱も、この大会にふさわしい幕切れで、歌が終っても、しばらく誰ひとり会場を立ち去ろうとはしなかった。」(下 158 頁)

14 原水爆禁止世界大会主報告資料 1955.8.6

15 原水爆禁止世界大会議事速報(第一日)1955.8.6

広島子どもを守る会

1953年(昭和28)2月22日結成、原爆孤児たちに養育資金や育英資金を送る国内精神養子運動を実施した。ノーマン・カズンズ提唱の精神養子運動に倣ったもの。運動は1964年5月、全部の子供が18歳をこえるまで続けられた。

16 広島子どもを守る会のリーフレット

顧問は長田新、会長は森瀧市郎、副会長は土谷巖郎・山口勇子で、事務局を広島市立児童図書館内においた。「原爆都広島の親たちよ、先づ原爆孤児を救おうではないか。さしあたっては原爆孤児精神養子運動を国内にも起そうではないか。進んでは広く全部の子供たちにすこやかでゆたかな児童文化と清浄で危険のない環境を与えようではないか。平和都市とは先づ何よりもすべての子供達が全市民の愛の眼で見守られるような雰囲気がかもし出される都市のことでなければならぬ。」とよびかけている。

17 広島子どもを守る会々報 第1号
1953.8.15

18 原爆で親をうばわれた広島の少年少女は訴える(広島子供を守る会)
1959.7

